

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 326 回 柔(やわら)の道は、今いずこ？ ~お稽古事に思う

2009.8.23

昔々、三歳年上の姉が、藤間流の日本舞踊をやっていた関係から、私も幼い頃、日本舞踊の舞台に立ったことがある。右も左も分からない幼子だが、お稽古でやたら厳しいお師匠様の顔をしっかり覚えている。結果、優秀な彼女は「名取り」だが、中途半端な自分は「名無し」である。

俺は男、日本舞踊なんて...生意気心が芽生え、男としてひ弱な体力を鍛え直そうと、小学校の頃から柔道の「街道場」へ通い始めた。紅白斑(まだら)帯の「鬼の師範」、それはそれは恐かった。そのまま中学時代は柔道三昧、ここでもいつも、乱取りの稽古に励んだ。

もう50年近いの昔の話、当時の子供はせいぜい、学習塾よりそろばん塾、「習うより慣れよ」の世界で、何も考えず毎日、必死に、そろばんを弾(はじ)いていた。これもお稽古事かもしれない。

母と姉が茶道と華道の師範をしている。そう、この世界「先生」よりは「師範」が似合う。茶道は私の大学の後輩が「江戸千家」の若宗匠だったので、当然流派は江戸千家家元直伝である。そんな雰囲気から、見よう見真似で茶道のお稽古も体験した。が、これもまた、半端に終わったのは、言うまでもない。でも、中途半端ではあるにしろ、今考えると私が育ってきた環境には、「お稽古」がいくつも関わっていたように思える。

何にしろ、お稽古事を体験した人は分かると思うが、稽古には教科書がない。指導書もテキストも、マニュアルも存在しないのが本来である。したがってお稽古は、学校の授業のような講義形式はとらない。教室とは違うところである。

稽古はすべて「かたち」でなされる。実はこれには深い意味があるということ、随分あとになって知った。

元々稽古とは、「古(いにしえ)を稽(かんが)う」という字の通り、古人を思いおこし、その経験に習うこと。色々な約束事ややり方を「型」といい、「型」を理屈として頭で知るだけでなく、からだで覚える。からだで古来のふるまい方を身につけ、主と客が「型」を交しあう。その「型」にこめられた心を通わせ合い、人に礼をつくし、大切にものをあつかう心身を養う。つまり、「型」というふるまい方を架け橋として、心のはたらきを呼びさまし、人と人の心を結ぶことを意味しているのである。

稽古とは、「耳に伝えて目に伝え、心に伝え、一筆もなし」と、伝えられてきた。だから稽古には教科書はない。ただひたすら稽古を通して「見習う」ことによって、舞(まい)の心、柔(やわら)の心、茶の湯の心が伝えられている。

そして、お稽古事は、やり方や手順を覚えればそれでよいというものではない。基礎的な動作や身のこなしを反復して稽古することで、からだを心を整え、礼節ある人格をつくることをめざしている。これは正に、禅の修行において、まず座ることが重んじられ、座ることこそが悟りをひらく最初の手がかりとされる教えと通じるものがある。

したがってかつての日本人は、お稽古事を精神的修行の「道」とし、崇高なまでに大切に育んできた。つまり「道」である稽古とは、誰かに教えてもらうものでなく、自ら自身を開眼させ、自分で自分の道を極めていくものであると思うようになった。

柔道がスポーツになってしまった今、講道館ですら、勝敗至上主義で選手の育成に励んでいる。オリンピックで活躍する彼らの満面の笑みを見るにつけ、柔の道はなきものと思わざるを得ない。